

Takayoshi SASANUMA

# 日本画家 笹沼 恭欣

届きそうで届かない高みを目指し、  
自己表現としての日本画を今日も描く。

ジャンルとしての日本画は、明治という新時代を迎えた日本が近代国家を目指す中で、この国で描かれてきた絵画を新しく西洋から流入した洋画（西洋画）と区別するために生まれた言葉である。一方、作品としての日本画は、日本ならではの風土、日本人特有の美意識や精神性によって育まれてきた絵画を指す。伝統に固執すれば良いというものでは、決してない。多くの日本画家は、狩野派や琳派、やまと絵などの伝統を受け継ぎつつも、洋画の色彩や遠近法を取り入れるなど常に新しい表現を切り開いてきた。そして、自然や自分自身と格闘しながら、より良い作品を創り上げてきたのだ。ここで紹介する笹沼恭欣も同様である。

『落葉』と『寂光』の2作は、水面を大胆な構図で捉えた絵画。しかし、そこに描かれた季節や状況は異なる。笹沼の「水シリーズ」の初期作品である『落葉』は、晩秋の自然を描いたものだ。墨に少し藍を加えて水面に映る空の色を表現したことで、ゆっくりと流れる白い雲が引き立っている。まるでモノクロームの静かな画面で自らの存在を主張するのは、紅色の落葉。実はこの時、笹沼は病を患っていた。健康に対する不安が、あえて遠近感を無視して表現した描写に現われているようでもある。『寂光』は打って変わって、鮮やかな初夏の風景だ。健康状態に希望が出てきた時に描いた作品だからか、画面全体からまばゆい光を感じる。水中の鯉と水面、そしてそこに映る木々。多層的表現を駆使して、奥行きの中にさらに奥行きを強調しようとした、笹沼の意欲作である。

ら、心のフィルターを通して、心象風景を描き、美を表現することが多い。自然は、自己の内面を個性的に表現するための鏡だとも言える。こうして自然を敬いながら描くという日本画の特徴が、笹沼作品からも感じ取れるだろう。



落葉  
90.0 x 90.0 cm  
岩絵具 墨 麻紙  
2007